

イリヤ ハッピーエンド  
ド

ゼステリア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、あるかもしれない奇蹟の物語。

F a t e ルート後を背景としています。

ただ、原作のF a t e ルートと違ってHFルートみたいイリヤは“彼”の正体を知っています。

この短編は、私がイリヤに捧げるクリスマスプレゼントです。

?どうかstay nightのイリヤが長い間土郎と幸せに暮らせる世界がありますように、そしてこの思いが奈須きのこさんと武内崇さん、ufotableに届くことを祈りながら……

p i x i v の方にも上げています。

h t t p s : / / w w w . p i x i v . n e t / n o v e l / s h o w . p h p ? i

d || 14331201

# 目次

アフター	28
クリスマスの奇蹟	1

## クリスマスの奇蹟

第五次聖杯戦争から10カ月が経ち、冬木市の遠坂邸の部屋で一人の少女が目覚めた。

「あ、やっと起きたか」

少女は首を回して自分に声を掛ける女性、遠坂凜を眺める。

「どう？イリヤ。何か不便な点とかあるの？」

凜はベッドで目覚めた少女、イリヤに聞いた。

イリヤは手を動かした次のベッドで起きて手足を動かしてみた。

「……いや、ぜんぜん。何の違和感もない」

「そう……よかった。正直、何か間違っているのではないかと思ったから」

何の異常もないイリヤを見て凜は安心する。

\*

2ヶ月前、イリヤがいきなり倒れた。

本人の言葉によると、寿命があまり残っていないからだという。当然のことだった。

そもそもイリヤの体は聖杯戦争が終わった後、イリヤが生存するという可能性を全く考慮せず、無理に聖杯の器として改造したのだった。

凜が周期的に体を見ていたが、ここまで堪えたことだけでも奇蹟だった。

「……長くても2ヶ月ぐらいかな」

その事実を知った時、イリヤは淡々と受け入れた。

「……まあ。今まで本当に楽しかったし。残った2カ月もこれまでのように楽しく過ごせば悪くないのかな」

「……」

笑いながら言う少女に士郎と凜は何も言えなかった。

「そんな顔しないで……知っていたでしょ？　いつかこうなるて。それに……わたし、もう十分過ぎるくらい幸せだったから。残った2カ月もこうやって過ごしたら、楽に行くことが出来るから」

小聖杯になった時点でイリヤは自分が長く生きられないという事実は以前から知っていた。既に達観していた。

これが自分の運命であり、変えられない事実だ。

仕方がなかった。これが自分の限界だった。  
でも、大丈夫。

元々は自分は聖杯戦争が終わった時死んだ筈だ。それでも数カ月を生き延びたのだ。  
これ以上甘えてはいけないだろう。

それに――

(あの人の心も分かったから)

士郎とタイガから聞いた「あの人」のこと。

何度も外国に行つて誰かに会いに行つたようだという言葉の真実を悟つた時、イリヤの心の中にいたあの人――衛宮切嗣に対する憎悪はすっかり治つた。

それだけでも、イリヤは救われたような気がした。

だから、自分はこれでいいと諦めてたけど――

「あきらめるなっ!」

彼は、士郎は言つた。

「あきらめるな。聖杯戦争が終わつて、やつと普通の女の子として生きていくことができるようになったのに、こんなに早く……こんなに……こんなに……きつと何か方法があるはずだっ!」

士郎は後悔した。自分の魔術の実力では何の役に立たないからイリヤのことはまず

凜に任せて、卒業後凜と一緒に外国を回りながら、イリヤの寿命を増やす方法を探すことにした。

なのに、こんなに早く別れが訪れとするなんて……

何もしなかった愚かな自分に腹が立つことと同時に目前に少女に何もしてあげられない自分に無力さを感じた。

「シロウ……」

頭を絞るように解決策を考え出そうとする士郎を見ながらイリヤは切ない感情を抱く。

そんな方法があるはずがなかった。 あったならとづくに実行していただろう。

「シロウ、もういいよ。 そんな方法はない。 わたしは……」

「でも……！でも……」

でも、この人は簡単にあきらめないだろう。

目の前にいる家族が、小さな少女がこんなに早く死んでしまうという事実を受け入れられないだろう。

救うことができるなら、自分ができる範囲で無理をする。

それが、衛宮士郎という男だから。

「……………ちよつと待って、今の体ではだめなら……」



瞬間、士郎は何かを思い出した。

「他の体で意識や魂を移す魔術はないのか？」

「え？」

イリヤは目が丸くなった。

「いや、だから……イリヤの今の体が限界だったら、他の体を使用すればいいじゃないかな？」

それを聞いた瞬間、イリヤは士郎が何をするつもりなのか気がついた。

士郎に言ったことはないが、以前に士郎を拉致した時城を自分のものにするために士郎の意識を人形に移す方法も考えていた。

士郎は自分が思ったのと似たような手法を教えなかったのに一人で考えたのだ。

ある意味、これも姉弟らしいと言えるかも知れない。

だが――

「もしそういう魔術があれば、新しいホームンクルスの肉体を作ってそこに……！」

「作れるの？」

「つ……それは……」

口をつぐんだ士郎を見ながらイリヤは苦笑した。

それに、士郎は分からないが、そもそも不可能だ。

確かに自分ならそのような魔術を使えるが、それは意識だけを移すことができる。最も重要な「魂」は肉体に残り、その肉体が死ぬ瞬間、自分も死ぬ。

そうだとして「魂」も移せばならないかと思えばそれもだめだ。

「魂」は肉体から離れることができない。いや、離ればいけない。

第三魔法、あるいはそれに近い特別な方法を使わずに魂を肉体から取り出したら、その瞬間、魂はバラバラになる。

肉体も同じだ。自分と同じ体ではなく、他の体に魂を移植すると、魂が自分が違うということを認識して肉体が崩壊しながら消滅する。

さらに自分は他のホムンクルスと違って人間とホムンクルスの混血であり、同時に一段階上の高次元生命体である。

たとえばドイツのアインツベルン本家にある資料と技術を使用しても、今の自分の肉体と全く同じホムンクルスを作るとは不可能だろう。

そもそも、もし聖杯戦争が終わった後すぐに本家に帰って作り始まったとしても時間に合わせる事ができなかつたのを今から作り出すのは無理だ。

だからイリヤはここで、切嗣が死んだこの地で最期を迎えるために、ここに残ると決めたんだ。

ここなら、もっと早く切嗣とお母様と会いに行くことができるかもしれないから。

その事実を士郎に語るために、イリヤは口を開いて――

「いや、ちよつと……意識を移す……新たな肉体……」

士郎の隣にいた凜が士郎が言った言葉を呟きながら何かを考えた。

「……………そう、どうしてそれを考えなかったのかな？ いや、でも……」

「リン？」

一人でつぶやく凜を見てイリヤは首をかしげた。

「士郎、しばらくイリヤの看病は任せるわ。イリヤ、まだ2カ月残ってるから諦めない

でくれて”

「え？」

「遠坂……何か方法があるのか!？」

何かを思い出したような凜に士郎は問う。

「……………確証はない。成功率も保障できないし……けど、できることは全部やって

みようか」

\*

2時間ぐらい経って、戻ってきた凜はイリヤを生き延びるためにタイガをはじめとす

る周りの人に病気を治すためにしばらく外国に行ったと暗示をかけて、イリヤを遠坂邸へ連れて行った。

そして凜はイリヤをベッドに寝かせて、イリヤと付いて来た士郎に自分の考えを話した。

「蒼崎……橙子……?」

初めて聞いてみる名に士郎は首をかしげる。

「そう。冠位の人形師、蒼崎橙子。対象と完全に同じ人形を作ることができる人よ。DNA検査さえ通過できるほどに」

「……マジかよ?」

「マジみたいよ。そしてその実力で自分と全く同じ人形を作って体を変えながら生きてみたい」

「え? ちょっと、それは——」

凜は自分の言葉を聞いて何かを気づいた士郎を見てうなずいた。

「士郎の推測通りだよ。その蒼崎橙子が作った人形を手に入れば、何とかなるかも知れない。できれば直接イリヤを見てほしいけど、封印指定状態だから追われているからそれは無理だろうし……」

「ちよ、ちよっと待ってリン！」

黙って聞いていたイリヤが凜に話した。

「何を言ってるの。貴女なら分かっているんじゃない、それが無駄というのわ……!」  
「イリヤ?」

急に凜に叫ぶイリヤを見て理由を知らない土郎は首をかしげた。

「人形に意識を移すことはわたしでもできる。でもそれだけ。魂を移すのは不可能よ。体に魂が残っている限り、結局肉体が限界を迎えたら、わたしは死ぬ。その人形師の話もただのうわさに過ぎないでしょ!?! もし事実だとしても、それはその人がとても非正常的であること、わたしに該当する話じゃない。いくらうつかりな貴女でもそれは分かるでしょ!?!」

「……」

凜はイリヤの言葉を聞いてしばらく目を閉じた後、イリヤに自分の考えを話した。

「……魂が残っているイリヤの肉体は魔術で冷凍保存させるわ。そうすれば、普通の人間のように数十年は生きられるでしょ。それができなくても少なくとも時間は稼げることができるよ」

「でも——!」

「ええ、成功確率は著しく低い。けど、これしか方法がないの」

凜もイリヤが考えている憂慮はすでに知っている。

でも、わずかしかない可能性でもこの少女を救うことができるなら、たとえ本人が止めたとしても譲歩するつもりはない。

「つ——低い程度じゃなんですよ！ 不可能よ！ リン、魔術師なのに何でそんな無駄骨をするの!?!」

「それは——」

「もういい！ わたしが死ぬということは変わらない。何があつても変わらない。だから無駄なことはやめて。わたしはもういいから……どうしてそこまでするの!?!」

イリヤは凜の考えを理解できなかった。

いや、正確に言えば、凜が自分をどうにかして救おうとするのは知っている。

しかし、凜が思った方法は奇蹟が起きない限り成功しない。そんな方法で解決することができたならとつくに実行しただろう。

何の意味もない行動、ないも同然である可能性。

失敗すればさらに辛いだけだ。そんなことを士郎と凜与えたくなかった。  
なのに、どうして——。

「イリヤと一緒に住みたいからだよ」

「……………え……………?」

イリヤはその音を聞いて隣を、士郎を見る。

「俺も遠坂も、藤ねえに桜も、みんなイリヤが俺たちと一緒に長い間生きてほしいと望んでいるからだよ。それに……」

士郎はイリヤの頭をなでた。

「俺はイリヤのお兄ちゃんだから。妹が死んでいくのを放っておくはずがないだろう？」

「……」

イリヤはうつむいたまま何も言わなかった。

「……」

「……」

「………はあ、本当に、シロウもリンも仕方ないね」

こんなの、うまくいくわけがない。結果は見える。

でも——

(そこまで言ってくれると……もっと生きたくなるじゃない……)

「どうせ死ぬ身だし。最後の賭けぐらいかけてみてもいいかしら」

\*

イリヤが承諾した以上、二人のやることは決まった。

イリヤの看病に関しては、アインツベルン城から降りてきたセラとリーゼリットに任せて、凜は時計塔を含め自分の伝手を動員して蒼崎橙子、あるいは彼女が作った人形の情報収集して、學園を休むことにした士郎とともに外国を歩き回った。

たまには遠坂邸に戻ってイリヤの状態を確認したり、遠坂の魔術とアインツベルンの魔術を組み合わせて意識を人形に移して固定させる魔術を研究したりもした。

——そして。

「これがその蒼崎橙子の人形なの？」

2ヶ月後、午前1時50分。遠坂邸にある地下洞窟。

その洞窟の底に描かれた魔術陣の上には何の特徴もない人形が横になっていた。

「ええ。間違いない。本当、見つけるのに大変だったわ」

「探してる途中に危険なやつらと会って、事件に巻き込まれて、やつと手がかりを見つけてもほとんどが徒労に終わり。時間に合わせられるのか不安だったからな」

「お金はなんとか手に入れることができたけど」

「イリヤの城にいるものと俺の家や遠坂の家のものを処分して、イリヤの手術費だと藤ねえの家にお金を借りてやつと買ったのだからな」

この人形を一つ手に入れるために経験した苦労を回想する凜と士郎の目はどこか遠い所を眺めているようだった。



「それじゃ、準備はいい？ イリヤ」

魔術陣の上に複数の寶石を載せて凜は後ろにいるイリヤを見る。

顔だけ見ても2カ月間でかなり衰えたことが見え、もう本当に時間があまり残ってないということを見せてくれるようだった。

「……………うん。いつでもいいよ」

「そう……………じゃあ士郎は外に出ていて。この魔術は術士以外の魔術師が近くにいるだけで問題が起きるかもしれないから」

「……………ああ。わかった」

できればそばで見守ってあげたかったが、ここにおいても邪魔だけだから、士郎は外で待つことにした。

「じゃ、外で待ってるねイリヤ。頑張れよ。きつとうまくいくから」

士郎はイリヤの頭を撫でながらイリヤを激励した。

「……………」

だが、イリヤは視線を下に向けたままじっとしていた。

「イリヤ？」

「……………シロウ」

士郎がイリヤの頭から手を引くと、イリヤは士郎の胸に抱きついた。

「……シロウ」

イリヤは精一杯士郎を抱きしめようとした。が、限界に近いその体では力がうまく入らなかった。

「イリヤ……」

自分を精一杯抱きたいが、それができないイリヤの行動に気付き、士郎はイリヤを強く抱きしめる。

抱き締めた瞬間、自分の腕の中の少女は、なんだか少し震えているようだった。

そんな少女に一体何を話せばいいか悩む時――

「……ケーキ」

「え？」

士郎の胸に顔を埋めたままイリヤは話した。

「今日、クリスマスだよね？」

「え、あ、ああ」

士郎の返事を聞いて、イリヤは士郎を見上げた。

「わたし、シロウが作ったクリスマスケーキが食べたい」

「……ああ！」

必ず帰る。そう言ったイリヤに士郎は笑顔で答える。

「最高のケーキを作ってあげる。それに藤ねえと桜、セラとリズも呼んでクリスマスとイリヤの歓迎パーティーをするから期待してよ」

「……うん！」

イリヤは笑顔で力強く答えた。

その笑顔を見た後、士郎はイリヤの後ろに立っている凧を見た。

「頼む、遠坂」

「ええ、任せなさい」

凧は自信に満ちた顔でうなずいた。

士郎が外に出た後、イリヤは人形の隣に横になった。

「始めるわ。目が覚めたら元気な体で目が覚めて気分が良くなるから楽しみにしてね」

「うん。よろしくね。リン」

凧は成功するのが当たり前だというような口ぶりで魔術を発動させ始めた。

魔術陣が輝いた瞬間、イリヤは目を閉じて意識が闇の中に落ちた。

\*

「……………(ハハ)は」

目を覚めた瞬間、イリヤの目の前に広がっているのは何も無い真っ白な空間だった。さつきまでいた遠坂邸の洞窟も部屋もない、何も無い場所。

「……………そうか。やはり失敗してしまったか」

意識はあるが、体の感覚がない。さらに、周辺には何も無い。

結局、失敗したのだとイリヤは考える。

「まあ、成功するわけないって分かってたけど……魔法もなく魔術だけでこんなことができるはずがないし」

失敗するのが当然だった。と、イリヤは諦める。

「……………シロウとリンには悪い事をしたね。あんなに苦労してくれたのに……そしてク

リスマスパーカーティ、結局行けなくなったね……」

心の中にある不安を隠して自分を激励してあげようとするのが見え透いていた二人の姿を思い浮かべながら、イリヤはすまない感情を抱く。

「……………わたし、死んだのか」

生きていた時には知らなかった感覚。

これが死か、とイリヤは不思議だと思う。

そして――

「……………何だろう、この感じ……」

もう一度、もう終わりだと自覚すると、イリヤはいままで感じたことのない不思議な気分になり始めた。

肉体がないのに、なぜか胸の鼓動が速くなるような気がした。

「別に、胸がどきどきするほど良い事ではないのに……」

理由は分からない。だが、この感じは止まる気配が全くないようだ。

それに、なんだか自分が震えているような気もした。

「別に震える理由はないのに…… もう、十分なのに……」

この10ヶ月、とても充実に生きたと自慢できる。

決して自分には来ないと思っていた日常は本当に楽しかった。

今まで自分が知らなかったことがこの世には多くて、不可能だと分かっても自分を生かすために精一杯努力してくれた優しい人達がいた。

諦めていたからこそ、考えてもみなかったらこそ、この10ヶ月の“人としての生”は本当に眩しく、甘く、美しかった。

(けど……)

幸せだった。楽しかった。

切嗣とお母様と一緒に住んでた時に戻ったような気がした。

ずっと自分が求めてきた、一時は諦めた望み。

だから、もうこの幸せが終わるといふ事実が――

「あれ？ どうして今、こんな思いをするのかな……」

さつきまであきらめていた自分としてはとても考えられないことを考えていたといふ事実には、イリヤは驚く。

どうしてこんなことを考えるのか。と、イリヤは思う。

その理由を考えるたびに、士郎と凜、大河と桜にセラとリーゼリットの顔、そして今まで過ごした日常を思い出した。

そこから出た答えは――

「ああ……そうなんだ」

本当に、簡単なものだった。

「これが……死ぬのが怖い。という感情なんだ」

人間なら、誰もが抱く感情。

死に対する恐れ。それが今自分の中にある感情の正体だということにイリヤは気がつく。

もつと生きたかった。もつと士郎の、みんなのそばにいたかった。

自分のせいで悲しむ士郎を思うとつらかった。

クリスマスケーキが食べたいと、帰ると言ったのに、このように失敗してしまつて士

郎をさらに傷つけてしまったという事実が悲しかった。

「変だね……ホムンクルスであるわたしがこんな感情を……」

もつと生きたい。 士郎との約束を守りたい。

ずっとその場所にいたい。

何度もそう思ってしまう。

(……たくない)

「どうして……今さら……」

(死にたくない)

「もう、遅いんだのに……」

「——大丈夫よ」

「……………え？」

死ぬという事実に恐怖に震えていたイリヤに、温かい声が聞こえてくる。

「イリヤは死なないよ。イリヤはまだここに來ることはちよつと早いから」

「え……………あ……………」

聞き覚えのある声。

とても安らかな、優しい声。

それが誰の声なのかイリヤは知っている。

「さあ、イリヤ。早く帰りなさい。大切な人が待っているでしょ？」

「待て……………お……………」

その瞬間、あたたかい何かが自分をかばっているようだとイリヤは感じた。

\*

「……………なによ、これ」

凜は今自分の目の前で起こっている現象に当惑を隠せなかった。

「人形の姿が……イリヤの姿に変わっている？」

今自分が使っている魔術はイリヤの意識を人形に固定させるだけ。

人形の姿をイリヤの姿に合わせて変化させるのはこの魔術が終わった後にする予定だった。

なのに人形の姿が勝手にイリヤの体に変わっている。

「いったい、何が起こっているの？」



\*

「へえ——、かなりよくわたしの姿を再現したと思ったたら、そうだったんだ」

「ええ、でもまさか16時間も寝るなんて…… まったく、まさか今回も時間を勘違いしたのかと驚いたよ」

凜に体の検査を受けながら、イリヤは自分の寝ている間のことを聞いていた。

「それはそうとして、一体何？これ」

自分たちが思った魔術とは違う効果を見せた結果に凜は顔をしかめる。

正確には、もともと凜とイリヤが思っていた魔術よりもさらに効果がよかった。

最初に魔術を作ったときは、体をうまく動かすのはもう少し時間がかかると想定していた。

なのに、今はまるで本当の自分の体のように動くことができた。

さらに、意識も完全に人形に固定された。

この肉体が完全に壊れない限り、意識が本体に戻ることはないだろう。

だからといって、これが第三魔法のようなものかと思えば、それはない。

イリヤの魂は今も本体にある。

まあ、今は氷の中に封印されて肉体の時間が止まっているから大丈夫だろう。

「ねえイリヤ、何か思い当たることはないの?」

「う?ん……さあ、どうかな」

検査を終えて、着替えながらイリヤは凜の質問に大雑把に答える。

「まあ、結果はいいから、今はどうなつてもいいんじゃない?」

「それはそうだけど……ううむ……」

確かに今は喜ぶべき時だけど、いったい何がどうなつているのかずっと気になつてい  
る凜は頭を抱える。

そんな凜を見ながら、イリヤは静かに笑う。

(わたし、本当に普通の人間のように生きれるようになったんだ)

イリヤは鏡を見ながら手足を動かす。

鏡の中にはもうすぐ死にそうだった自分はなかった。

(まさか、こういうのが成功するなんて……)

本来なら成功できなかったはずだ。

なのに、成功した。

これはかつて小聖杯として吸収した英霊たちの魂の残骸が残した力による最後の奇蹟なのか、それともただ運が良かっただけだろうか。

(……………ううん、あれは、きつと……)

その可能性を含めて、イリヤは一つの可能性を思い出した。

あの時、言峰によって大聖杯の穴を開けた瞬間、胸の中に温かい何かが入ってきたような気がした。

懐かしさを感じさせる温もり。

そして、あの時の温かい声。

あれは、きつと……

(……ありがとう、お母様)

イリヤは自分の胸に手を置いて、今はもういない、自分にもう一度命をくれた温かい奇蹟に感謝を伝える。

\*

遠坂邸から出て、イリヤと凜は衛宮邸に向かう。

時間はもう夕方を過ぎて、しだいに暗くなっていた

「あら」

道を歩いている途中、空から降ってきた真っ白な何かは凜とイリヤの目の前を通り過ぎた。

「雪か。今年はホワイトクリスマスだね」

空を見上げながらどンドン降り続ける雪を見て、凧は奇麗だという感想を抱いて道を歩く。

「……ねえ、リン」

「何？」

「わたし、一度ドイツのアイントベルン本家に帰ろうかと思う」

「え……」

意外な言葉に凧は隣にあるイリヤを見る。

「わたしはもう大丈夫だろうけど、リンの寿命の問題はまだ解決されていない。わたしがこんなに元気になったからしばらくの間は大丈夫だけど、このまま捨て置くわけにもいかないわ」

自分と同じように、寿命の短いまま生まれた自分のメイドのことを考えてイリヤは話す。

肉体が自分と同調しているだけに、自分が死ぬと彼女も死ぬ。

逆に自分が死ななかつたからもつと生きられるようになったが、それもそう長いとは言えない。

「だから、今度はわたしがリンズを助けてくれるの。シロウとリンがわたしをあきらめな

かったように、わたしもあきらめない」

そう言って笑うイリヤの顔には、不安はなかった。

あるのは必ずリズの寿命の問題を解決するという決意と成功するという自信だけだった。

「そう……」

その顔を見て凧は助けてもらったから、今度は自分が誰かを助けるといふどこかの誰さんのことを考えた。

だが、止めるつもりはない。

この子が誰かのために努力すると言ったのだ。それを自分が止める理由はない。

「じゃあ、私も手伝ってあげる。一度成功したから、役に立つと保障するわ」

「ふふっ…… ありがとう。よろしくね」

今後の方針を決めで、イリヤと凧は歩き続けた。

そしてついに、目的の場所が目に入った。

「あ……」

門の前には自分の大切な人が待っていた。

ずっと待っていたのだろうか。

頭と肩には雪が少し積もっていた。

(まだ、ここにいてもいいんだ)

一步、一步、大切な人に向かって一步を踏み出す。

(キリツグ。わたし、まだそちらに行けない。会いに行くのは少し延ばしておくね)  
たとえばあの人が自分を女として見ていないとしても構わない。

彼の心の奥底にある「彼女」に勝てないというのはすでに知っている。

でも、妹として、姉として、見守らなければならない。

目の前の大切な人がかつてバーサーカーに倒れた「彼」のようにならないように。  
そう思いながら少女は少年の前に近づいていく。

少年も自分に近づいてくる少女を見た。

その顔には喜びの色が溢れていた。

「おかえり。イリヤ」

少年は笑って少女を迎える。

少女は涙ぐんで少年を向けて笑った。

「……うん！　ただいま。シロウ！」

こうして、少女の人生は続く。

これは数を数え切れないさまざまな可能性の一つである世界の話なのか、それともどこにもない夢想の話なのか、知る者はない。

だが、これだけは確実に言える。

家族のぬくもりと当然な日常を願って、

短い寿命を持って、

誰かを愛した少女に――

救いがあることを願った誰かがいたのだと。

## アフター

「ふう、もう新年か」

「そうだな」

1月1日。午前0時0分。

衛宮邸の庭先の縁側でイリヤと士郎は空を見上げていた。

「今更だけど、何か不思議よね。わたしがこんなに何度も新年を迎えるなんて」

「あれからもう何年もたったのか……」

あの奇蹟の日から何年が経って、小さな女の子だったイリヤは今は背が伸びて体つきももう子供のような姿はなく、すっかり美人になっていた。

その姿はまるで「あの日」自分を生かしてくれた「彼女」にそっくりだった。

「……………」

イリヤは隣に座っている士郎を見る。

「ん？どうしたのイリヤ？」

「……………ううん、なんでもない」

隣にいる男もあれから背が高くなって頼もしくなった。



「彼」がもつと年を取ったらこんな感じだったかな、とイリヤは思わず思った。

「ただもし今のわたしはただ夢を見ているだけで、現実では実は死んでいつているのではないかと思っただけ」

「そんなわけないだろ。イリヤは今こうして俺と一緒にいるし、俺たちが今まで過ごした毎日は間違いない事実だ。これが夢なわけ——」

「ふふ、知っているよ。冗談だよ、冗談」

真剣に反論する士郎の姿を見てイリヤは笑う。

「でも、本当にそう思ってしまうくらいにすごく幸せだよ。わたし」

「イリヤ……」

「あ、満足したんじゃないよ？ わたしは欲張りだから。これからももつと幸せに過ごすからね」

今の幸せを手放すつもりはない、と入谷は付け加えた。

人間として、キリツグとお母様の分だけ一生懸命生きていくと決めたから。

彼女はこれからどんな事があってもそばにいる唯一の家族と共に生きて行くだらう。

「去年はいろんなことが多かったけど、今年はどんな一年になるかな？」

「さあ、毎年そうだったけどどうなるか分からないからな。けど、だから楽しいんだろ

「？」

「ふふ……確かに」

毎年、この日が来るとイリヤは期待感を抱いて明日を、そしてまたその明日を待つ。

以前の自分では決して夢見なかつたはずの経験を彼女は毎年感じている。

「じゃ、早く寝るか。明日の朝には藤ねえに遠坂、桜と一緒に柳洞寺に行かないといけな

いし」

「そうね、セラとリズが車で乗せてくれるけど、早く寝ないと朝に大変だから」

イリヤと士郎は起きて部屋に戻ろうとした。

だが、なぜかイリヤは立った後動かなかつた。

「シロウ」

「ん？」

士郎は振り向いて自分を呼んだイリヤを見る。

月光を浴びて銀髪を輝かせながら笑っているイリヤの姿はとても美しかった。

美しい女は幸せそうな顔で士郎に言った。

「今年もよろしくね」

女は生きていく。

今日も、明日も、来年も、数十年後も。

今年はどんな一年になるだろう、と期待しながら大切な人たちと一緒に日常を生きていく。

これは一つの可能性であるとする世界なのか、それとも単なる夢想到過ぎないのか、それを知る者は今も、今後もない。

だが、どちらにしても、これだけは言える。

きつと、こんな世界があっても――

間違っ  
ては  
い  
な  
い  
だ  
ろ  
う。